

人が変わらる喜び

黒岩重吾 〈作家〉

絵 中西 勝



私が最初に海外旅行に出掛けたのは、昭和三十一年代の後半である。当時は香港を中心に東南アジアを廻っていた。その当時の香港、東南アジアはひつそりとした感じで、現在のように日本人の旅行客が押し掛けていなかつた。そういう点で充分

に旅情を満喫することが出来た。

私が最初に香港を訪れたのは昭和三十九年で、同行者は集英社の編集者M氏であつた。当時、九龍側のカスバ九龍城はまだ健在で、暗黒街の真価を發揮し、警察も手がつけられなかつ

た。

だが、かつて金ヶ崎に住んでいた私は、こういふカスバを訪れるのが大好きである。中国人のガイドは、危険だから入らないで欲しい、と必死になつて止めたが、私はガイドの忠告を無視した。香港に来た第一の目的は九龍城を訪れることだつたからである。

九龍城が危険な場所であることは承知していたが、私には何故か、絶対危険を加えられない、という自信があった。

ガイドは入らない、というので、私とM氏だけが見学することにした。M氏もかなり悲壮な思いだつただろう。

最も危険なのは、九龍城は迷路のようになつており、道に迷うと、なかなか出られないことである。余りうろうろしていると強盗にやられ、金銭から着ているものまで盗られる、という。

私はカメラをガイドに預け、すたすたと歩いて行つた。崩れ落ちそうな古い石造りの家が狭い道の両側に並んでいて、陽当りが悪い。

下水の排水が悪く露路のような道は、泥水を含んでいて、歩くと音を立てる。

石造りの家の一階には、殆どドアがなかつた。

部屋の中は薄暗く、眼を凝らさなければ、識別出来ない。だが歩いているうちに薄暗さに慣れ、内部が見えるようになつた。

痩せた裸の老人が阿片を喫つていたり、椅子に坐つた半裸の女が股を開いて私達を呼び込む。年齢不詳の女達だつた。下水の匂いが鼻をつき息苦しい。時々、黒いズボンに、よれよれのシャツを着た若い中国人達と行き合つた。確かに彼等の眼

付きは異常だつた。

何のためにやつて来たのか、ととげのある視線を私達に浴びせる。石の部屋に引張り込まれたなら、それで終りである。

隙を見せたらまずいので、そんな時、私はM氏に話し掛け、平然と彼等の視線を受けた。ただ彼等に犯行のきっかけを掴ませないために、道だけは譲つた。

道が狭いので、一度、そういう連中の一人と肩を触れてしまつた。

私は直ぐ、チュイプチ、チュイプチと謝つた。私の謝罪が余りにも早かつたせいか、彼は私を見ただけで、襲い掛つては来なかつた。

辻を曲る時、私は左、と自分に呟いた。次の辻の場合は、右、と呟いた。つまり、私は左、右、左、右の順序で歩いたのである。

だが、なかなか出口に出ない。全くの迷路である。或る部屋の前まで来た時、私達は中から呼ばれた。見ると中年の男が、阿片吸引具を持って手招いていた。

「テン ダラ！」

と彼はいつた。

彼の傍には、全裸の女が横たわつていた。

これまで私は九龍城の住人から声を掛けられたことがなかつた。声を掛けられないのも無気味だが、実際に声を掛けられると、押えていた恐怖心が頭を持ち上げた。

「アイ アム ソリー ノー マネー！」

と私は答え、慌てて引き返した。

次の辻を曲る時、振り返つてみると、ランニン グシャツ一枚の男は阿片をくゆらしながら、道路

まで出て、私達を眺めていた。

幸い、右、左の順序で來たので、私達は迷うことなく無事九龍城を出られたのだった。

中国人のガイドは、自分が案内した日本人で、勝手に九龍城に入ったのは、あなた達だけだ、と感嘆した。

M氏は今でも、その時のことと思ひ出しては、本当に死ぬ思いだつた、といつてゐる。

二度目に香港を訪れたのは、昭和四十五年だったが、その時はすでに九龍城の半分は壊され、住人のための新しいアパートが建つていた。

最初の香港旅行では、もう一つ思い出がある。その翌日、私達は九龍側のダンスホールに行つた。

ダンスホールといつても、お茶が出るだけで、女性と遊ぶための店である。

私達が入つたのは、三流のダンスホールだつた。私の傍にいたのは、色白の華奢な女性だつた。

美人ではないが、三流ダンスホールには勿体ない女性だつた。名前は忘れたが、私は金を払い、彼女を連れ出したのだ。

眞面目なM氏はこういうところの女性とは遊ばない。だがM氏は私の身を心配して彼女のアパートの傍まで付いて來てくれた。

私はアパートを見て、少し気持悪くなつた。九龍城の石の建物のように、今にも崩れそうな古びたアパートだつた。そんなアパートが固まりあつて建つてゐる。

だが私は彼女の白い歯を見て、決心を固め、石の階段を上つた。電灯が階段についていらない。僅かな月明りを頼りに、四階まで上つた。彼女は時々、踊り場に立ち、恐る恐る上つて來る私を待つ

てくれた。

彼女の部屋はワンルームで、古びたベットと、壊れそうな椅子、テーブル、安物の洋服箪笥などがあつた。驚いたことに、壁に掛けてあつたポスターは、日本の映画俳優のものだつた。ただ、窓からの眺望は素晴らしい。

香港島の灯群が一望の許に眺められた。

私と彼女は部屋でコニャックを飲んだ。私は彼女が要求した金額の倍近くの金を払つた。そして、これで總てだ、と空になつた財布を見せた。余分の金はズボンに作つた隠しポケットに入れてあつた。

彼女は片言の日本語と英語を喋る。

私は彼女が少女時代に、両親と共に、中国本土から香港に逃げて來たことを知つた。

両親は数年前に亡くなり、現在、彼女は一人で働いて生きている、という。

多分、私は、彼女の話を疑いながら聴いていたのだろう。そんな私の気持を見抜いたのか、彼女は金象嵌の銘文のある香炉を簾笥から取り出した。代々家に伝わつたもので、家の宝だつた、と私に告げた。

値打ちは分らないが、中国の古い名門氏族が持つていそうな気品があつた。そういうえば彼女の指は細くて長い。私は何となく彼女の指に名門氏族の血を感じた。

十一時頃、私は彼女に送られて暗い階段を下りた。

M氏の姿が見えない。こんな時刻なのに、食糧品店が店を開いていた。

彼女はその店に入ると、バナナを買つた。私に

プレゼントだ、と差し出す。私は喜んでバナナのプレゼントを受けた。

その時、M氏がガイドとやって来た。

M氏は私を待っていたらしいが、なかなか出でないので、ガイドを呼びに行き、戻つて來たところだ、という。実際M氏は息を切らしていた。あれから、もう十五年以上の歳月が流れたが、

あの時のバナナの重みは、今でも記憶にある。東南アジアの旅行を終えると、私はヨーロッパに出掛けるようになつた。昭和四十年頃からだつた。

最初のヨーロッパ旅行は、ルボライターのS氏と出掛けた。コペンハーゲンからアムステルダムまで飛行機を利用し、コペンハーゲンからはヨーロッパ特急に乗つた。

一等のコンパートメントは

四人乗れる。偶然、若い日本女性と同じコンパートメントだつた。話し合つてみると

彼女は、日本の大学を出て、ドイツの大学に学ぶため來た、という。私は片言の英語を喋れるが、ドイツ語は全く駄目だつた。ビールを飲み良い気持になつた私は、彼女に、一つだけドイツ語で歌を歌える、といった。

彼女が歌つてみて欲しい、といったので、私は歌つた。ポーラ・ネブン主演の「夜のタンゴ」の主題歌である。学生時代映画を観、感激してレコードを買った。だから学生時代から、この歌だけは歌えたのである。

彼女は熱心に耳を傾けて聴いていた。私が歌い終ると拍手してくれた。



「この意味、分った？」

と私は訊いた。

彼女は笑いながら首を横に振った。私のドイツ語の歌は、彼女に全く通じなかつたのである。

数年たつて、フランクフルトのレストランで、私はアコーディオン弾きと歌手に、「夜のタンゴ」をリクエストした。

歌手は哀愁の籠つた声で歌つてくれた。歌手の歌を聴きながら、私は、私の歌が彼女に通じなかつた理由が分つた。私はのばして歌う言葉をのばさず、のばさないで良い言葉を勝手にのばして歌つていたのである。これでは、通じないのも当然である。

この十年間、ヨーロッパに行くと、私は日本人が行かない場所を好んで歩いた。そのため危険な目に遭遇したこともある。

だが、たんに観光名所だけを歩いていても意味はない。勿論観光名所には、それぞれの歴史が息づいている。だから、観光名所を見学する時は、前もつて、その場所や人物の歴史を徹底的に研究しておくべきだう。

たんにガイドブックを頼りに行くよりも、研究しておいた方が、ずっと感動が深い。

ヨーロッパでは、比較的デンマークが好きである。デンマークについては、これまで、小説や隨筆に書いて来ている。

ヴァイキングの子孫であるデンマーク人は、比較的おおらかである。この頃は犯罪も多くなり、コペンハーゲンなど、麻薬基地の一つにされている。それでも、コペンハーゲンの街を歩くと、私はのんびりした気持になる。パリのように汚なく

ないし、ローマのように搔つ払いに気を配る必要もない。

三年前、コペンハーゲンに行った時、私は港の傍のヒッピー村を訪れた。そこには世界各国のヒッピー達が集まっている。

彼等の中では、昼、仕事をしている者も多いといふ。それでも、日本では考えられないことである。

ヒッピー村を歩いていると、陽焼けした日本人のヒッピーと会つた。作家の取材根性で、私は急速、日本語で話し掛けた。

だが相手は笑いながら首を横に振つた。日本人と思つたが彼はエスキモーだった。

「日本人と、良く間違えられる」

と彼は親しみの籠つた眼で私を見た。

コペンハーゲンのヒッピー村が、現在も存在しているかどうか、私は知らない。

ただヒッピー村でありついた食事だけは、お世辞にも旨い、といえなかつた。

海外旅行をしていると、色々な出合いがある。それには矢張り、思い切つて相手にぶつかつてみることが必要であろう。

私は少年時代から、人見知りする方で、見知らぬ人に声を掛けたりしない。

だが不思議なことに、日本を離れると、平気で声を掛けることが出来る。

自分でも人格が変わつたのではないか、と呆れるほどである。

しかし、考えてみると、海外旅行の魅力は、そういうところにあるのかもしれない。

こうべにふれあいのディテールを

心の通う店創り

nick
KOBE NAGOYA TOKYO

神戸日建

商業施設全般・調査企画・店舗装備・設計施工

株式会社 神戸日建

本社(設計室) 神戸市中央区御幸通3丁目2-20

PHONE (078) 252-1321(代)

神戸事業部

PHONE (078) 251-3525(代)

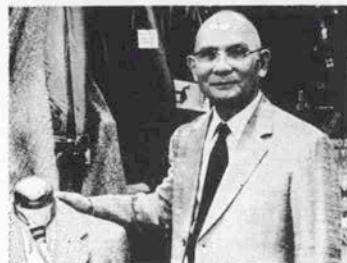
名古屋事業部

PHONE (052) 561-3618

東京事業部

PHONE (03) 278-1369

ハイセンスな紳士服で
最高のおしゃれを



三恵洋服店

神戸・元町4丁目 (078) 341-7290

■私の旅日記

外国みやげ

音と匂い

鴨居 羊子

〈デザイナー〉



右：ブズーキに合わせてゾルバダンスを少年達は踊る。左：ヘラクリオンの宿の近くのろばと私

外国の旅に出たら、その国の音と匂いをおみやげにもつて帰るのが一ぱんいいな！と当り前のことなのに、あるとき、悟つた！と自分で手を叩いた。

といつても、パリーへいったら最高の歌手のシャンソンのレコードと、香水なら世界一のジャンパトーのジヨイとかミル——なんてことを言っているのではない。それこそ当たり前で、そのレコードは日本にもきてるだろうし、香りなんて、少し高いが日本にズラリと世界のものが並んでいる。

ある日、『ロシアの香水よ』といつて友達からもらった香水ときてはどうだろう。十センチ立方の真四角な箱に大ゲサにクレムリン宮殿がプリントされていて、あけてみたら、もっこりした醤油びんみたいな異様なびんに飴色のサラダ油のような色の香水が入つていい。向うの人間は体臭がきつから、とりあえず匂い消しのためつける香水よ。みんなこんなものケイベツして、いらないって言うんだけどあなたいる？」と友達は言つた。私は目を輝やかせて、いります、いりますとおいただいて香水をもらつた。ロシアの太つたマダムが、毎朝、服を着る前に、それも働くエプロン姿の奥に、これをすりこむところを想像し、すががしい生活の匂いがただよつ

てくるようであつた。

ギリシアのクレタ島に遊んだときは、どんなオノボロ車も小さいブレーヤーがギリシア音楽のブズブズーキを奏でていた。いい音色だなあーと思うとすかさず運ちゃんに「それ何という曲？」と名前を聞き、あとでレコードを買に行く。知り合つた少年達が、ある日小さい車でヘラクリオンの町をドライブしてくれた。

やっぱりブレーヤーから悲しげになすよしもがな」と渴望している風にも聞えた。白い土壁の家と家の合間からびっくりするほど青緑色のエーゲ海の色がとびこんでくる。少年達は、サガボー（汝を愛す）の歌をレコードに合わせて、一せいに歌い出した。坂道が多いので、上り坂になると、レコードは急にゼンマイのゆるんだようなスローな音になる。助手席の少年は、あわてて、ゼンマイをまくようにブレーヤーを直す。曲の音色と、少年達の歌声が、奇妙に悲しくあでやかに、クレタ島にひびいていった。

私は旅行カバンに、もちろんたくさんのブズーキのレコード（日本には一枚もない）をつめこんで帰日した。

私の旅日記

道東旅日記

妻への免罪符

奥 村 孝

（弁護士）

ここ数年年一回の休暇旅行を妻と楽しむことにしてる。車が好きでハンドルを握れば乗物酔を決してしないという妻と飛行機で飛びレンタカーで廻るという旅を思ひ立ってから南九州・長崎・熊本・東北諸県と二泊三日の旅行を続けている。こんな旅が妻への免罪符となれば安いものである。

原野に朱色の冠を持つ鶴が放し飼いされている光景に神戸から僅か五時間で接する。丹頂鶴と別れて国道二四〇号線を一路北上、両側は原野か放牧場で殆んど集落はなく広い北海道に驚きながら阿寒湖を眺めアイヌ村で買物をし、美幌峠で屈斜路湖を望みそこで反転して霧の摩周湖に着く。霧が左から右に流れ行く様子を展望台から満喫し川湯温泉に泊る。本日の頼んでいたレンタカーが空港に用意されており直に丹頂鶴自然公園に行く。

午前八時出発大阪空港までひとり走り、駐車場に車をいれて千歳空港までDC10、飛行時間一〇〇分、釧路行DC9に乗り換える。待ち時間九〇分飛行時間四〇分、自宅から釧路空港まで約五時間である。大阪空港を出発する時釧路行きは霧のため欠航の虞れありと注意を受けたが釧路は快晴である。頼んでいたレンタカーが空港に用意されており直に丹頂鶴自然公園に行く。

七月某日（土曜日）

川湯温泉を出て藻琴村を経て斜



美幌峠より屈斜路湖を望む

里に向う。

沿道これまた原野、途中あちこちの原生花園を見る。エゾスカシユリ・ハマナスそして名の判らぬかわいい花々。ウトロで昼食、お店の人がトキ魚と教えてくれた舌にとろけそうな美味のお刺身に又々驚き、更に知床林道を進みカムイワツカの滝に至る。これ以上は車は行けないので引き返し知床五湖を散策する。入口に知床憲章の看板があり「知床の原始的自然を保護する」。丹頂鶴と別れて国道二四〇号線を一路北上、両側は原野か放牧場で殆んど集落はない。日曜日というのに遊覧客は車は行けないので引き返し知床五湖を散策する。入口に知床憲章の看板があり「知床の原始的自然を保護する」。丹頂鶴と別れて国道二四〇号線を一路北上、両側は原野か放牧場で殆んど集落はない。日曜日というのに遊覧客は多く水と緑と静けさを堪能する。近くの岩尾別温泉に泊る。一軒しかない旅館は「ホテル地の涯」という。地の涯の名にふさわしい環境である。本日の走行一五〇キロ。

七月某日（月曜日）

ホテル地の涯を出発斜里町を経て濤沸湖・網走湖・能取湖を横に見ながらサロマ湖に行きつき、オホ

ーツク海の薰りを十二分に吸う。昼食後網走に戻り折角の機会なので網走刑務所の入口で記念写真をとり女満別空港でレンタカーと別れる。本日の走行二〇〇キロ。

午後三時女満別空港発YS11、千歳でトライスターに乗り換え大阪空港に午後七時三〇分到着。六〇時間振りに喧騒の神戸の街に帰り、自然を求めた駆け足旅行終る。



ボストンのレストラン（魚料理専門店）で
エビー四と真剣に（？）格闘中の筆者

旅を充実させる事、それは私の場合演奏会を成功させかつその土地の人々や風物によく馴じむことだと心得ている。その為には、なるべく旅に疲れないよう、日本にいる時の習慣をあまり大きく変えないように気を付けていた。なにも枕を持って歩くという意味ではない。旅行にはホテル生活がつきものだが、ましてや海外でのホテルでは日本での普段の生活とはかけ離れていて何かと不便で気に入らぬことが多い。でも余計な神の部屋をできるだけ私の気に入るよう模様替えを試みる。場合によつてはベットまで動かす。机やいすはもう思いのままだ。次に日ベットメイキングのおばさんがちゃんと元通りにしてしまふのだが、またもう一度こつちの好みに配置しないおばさん、元に戻す事をこれでやつとあきらめる。

ヨーロッパへの演奏旅行という旅を私は幾度か経験しているが、これははつきりした目的（つまりコンサートをするという）がある、しかも決められた日時に所定が、かなりの緊張感と拘束感がある。かなりの緊張感と拘束感をいつもながら要求される。かと言つてこれが私にとって苦痛かと言われば、実はそうでもないのだ。もともと私は旅好きでもあつた。でも日本にいる時はそう毎日レストランに行って御馳走を食べている訳はないので、毎日毎食ホテルのグリルではいくらタフな私の胃袋もまいつてしまふ。スーパーでパンやハム、チーズ、いろいろなサラダ、果物そしてビールやワインを買いこむ。「自分の」部屋で自分の口に合つたものをリラックスして食べる。しかも新鮮なものを安く手軽に食べられたと思うと元気が出てくる……旅慣れるといふことはこうやつて自分のベースを作りそれを守つていくことだ。

私は観光やショッピングがニガ手だ。もつと違つた旅行の楽しみ方があつてもいいと思う。変つた事と言えば私はよく音楽家の仲間に彼等の自宅へ招待される。仕事の場での表情とは別の一顔が見られる。しかもその人の生活の様子がうかがわれて興味深い。お別れの時にはもう十年來の友人のようになつてしまふ。旅のおみやげに私はこのような人とのふれあいを持つて帰ることにしている。

■私の旅日記

マイペースで 旅に慣れる 朝比奈千足

（音楽家）

てこんな仕事の旅でも結構楽しんでいる。

旅を充実させる事、それは私の

場合演奏会を成功させかつその土地の人々や風物によく馴じむことだと心得ている。その為には、なるべく旅に疲れないよう、日本にいる時の習慣をあまり大きく変えないように気を付けていた。なにも枕を持って歩くという意味ではない。旅行にはホテル生活がつきものだが、ましてや海外でのホテルでは日本での普段の生活とはかけ離れていて何かと不便で気に入らぬことが多い。でも余計な神の部屋をできるだけ私の気に入るよう模様替えを試みる。場合によつてはベットまで動かす。机やいすはもう思いのままだ。次に日ベットメイキングのおばさんがちゃんと元通りにしてしまふのだが、またもう一度こつちの好みに配置しないおばさん、元に戻す事をこれでやつとあきらめる。

この部屋が「自分の」部屋になる。仕事が済んで自分の家へ帰るという感じがしてとてもくつろぐ。

次は食事のことだ。目的地に着くとまずスーパーマーケットを探しておくる。幸いには食べ物に好きな嫌いが少ないので、ヨーロッパの日常の食事はだいたい平気だ。それでも日本にいる時はそう毎日レストランに行って御馳走を食べている訳はないので、毎日毎食ホテルのグリルではいくらタフな私の胃袋もまいつてしまふ。スーパーでパンやハム、チーズ、いろいろなサラダ、果物そしてビールやワインを買いこむ。「自分の」部屋で自分の口に合つたものをリラック

スして食べる。しかも新鮮なものを安く手軽に食べられたと思うと元気が出てくる……旅慣れるといふことはこうやつて自分のベースを作りそれを守つていくことだ。私は観光やショッピングがニガ手だ。もつと違つた旅行の楽しみ方があつてもいいと思う。変つた事と言えば私はよく音楽家の仲間に彼等の自宅へ招待される。仕事の場での表情とは別の一顔が見られる。しかもその人の生活の様子がうかがわれて興味深い。お別れの時にはもう十年來の友人のようになつてしまふ。旅のおみやげに私はこのような人とのふれあいを持つて帰ることにしている。



オアフ島のマカブーの丘でハンググライダーを楽しむ女性に早速インタビュー

恐怖の瞬間だがそれ

私の旅はいつもわあわただしい。どんなにゆとりを持たせて日程を組んでみても、結局はあたふたと心残りのまま帰つて来る。仕事熱心というよりは生來の好奇心と、おっちょこちよいのなせで、それに、世の中にはほん

覚悟を決めて日本を出発しても、いつの間にか取材根性が頭をもたげてきておちつかないのである。

生來の旺盛なる好奇心を發揮

私の旅日記

生來の旺盛なる

好奇心を發揮

佐藤 早苗

〈フリーライター〉

とうに不思議なことや、驚くことが沢山あるのだから仕方がない。

この写真はオアフ島のマカブーの丘で、ウサギ島がすぐ眼下に浮かんで見えるところ。

いつしょに写っている女性はそのときハンググライダーで空中飛遊を楽しんで、無事着地したばかりであり、早速インタビューにかけつけたところである。

彼女は博物館に勤務するごく普通の娘さんで、友達のボーライフレンドがハンググライダーをやつているから私も始めたのだといとも簡単に云う。

危険率はグライダーやスカイダイビングよりもはるかに高く、半年の間に十数人もの墜落死していると

いうから命がけだ。

目もくらむような高い丘の飛出し台から一気に、まつ青な海に向

かって飛び立つ。気が遠くなるよう

マカブーの丘に集まる鳥一族の常連は三十人ばかり、そのうち数人が女性である。

ハンググライダーをたたんで車の上に積んで続々と丘に登つて来る。友達に手伝つてもらってカラフルな羽を組み立てる、まるでブールの飛込台から飛ぶように躊躇なく踏み出していく。

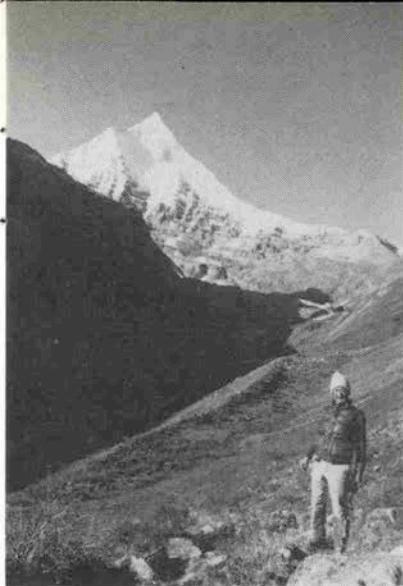
なかには夫婦で無線機をたたきて飛遊し、エクスターの中でも語り合うという人達もいた。私はついつい時を忘れて彼等の話にのめりこんでしまう。

せっかく地上の樂園にやつて来たのに、またひと泳ぎも出来なかつたなあ……などとぼやきながら、それでも結構満足して帰つて来るのである。

が彼女には何にもまさるエクスターなのだ。

「死」が背中に張りついた緊張感と、全身に風をはらみ、自然を見おろし、鳥になつて空中を旋回するあの陶酔境は飛んだ者でなければ分からぬ、と彼女はまだ醒めやらぬ上ずつた声で云うのである。

人間はレオナルド・ダ・ビンチの頃から鳥のようになつて飛ぶことに挑戦した。だからヒロコプターもジェット機も生まれたわけだが、不思議なことに、鳥のようになつて飛ぶたい、という欲望はまだ満たされはしないらしい。



ツェリムカンを背にして標高4000mに立つ

馬方などは国営旅行社（国王の妹に直属）から派遣される。隊員九人、ガイドほか九人、馬二十二頭

ドウルック・ユル、竜の国、自らの国をそう呼んでいるヒマラヤの王国、ブータンの国境の町ブンツォリンに入ったのは昨年の十月末の夕刻だった。最年少は寺本沢路屋社長、あとは五十、六十歳代の自称壮年ばかり。アテンダントは日本山岳会エベレスト隊員だった伊丹君。人手不足のブータンではトレッキングには人夫よりも馬が利用され、ガイド・コック・馬夫などは国営旅行社（国王の妹に直属）から派遣される。隊員九人、ガイドほか九人、馬二十二頭

■私の旅日記

誇り高き

ブータンの人々

長 島 隆

（神戸地下街株副社長）

が隊の総員でした。最近まで鎖国していたこの国で、初めて奥地のチベット国境地帯へトレッキングを許され、行く先々で外国人とは初対面の素朴な村人たちに親切に迎えられた。

第一日めはパロ渓谷ぞいに北上しグニチヤワ（高度二、七八〇m以下同じ）陸軍の演習地に幕営。

翌朝、実弾射撃の轟音に追いたてられるようにして馬の隊列は急峻

な山腹を一挙に高度差一、〇〇〇m以上を急登、樹林帯を越えて草原のトンブランショ（四、一〇〇m）で幕営。ここは夏はヤクの放牧場になるところ。ヒマラヤンブルーの空に夕陽が落ちたあとは満天にこぼれんばかりの星。翌日、雪のタグルン峰（四、四〇〇m）、金山シャクナゲの群落に覆われた山を越え渓谷に下りソイヤクサ（三、七一五m）で幕営。どこで伝聞聞いたのか薬を求めて男女がテントにやってくる。薬効は素晴らしい

ようだ。次の日、

枯れ草と岩の急斜面を、カモシカを横目に見ながらジグザグに登り雪の

ボンティイ峰（四、七四〇m）に着く。ここから北面の山は雪の世界。

コバルトブルーの

青空のもと、足もとに二つの氷河湖、その向うにツェリムカン（六、九三五m）の白銀の三角錐を望んで息をのんだ。静寂の世界に吸いこまれそうな二つの氷河湖を過ぎたところで、先頭のガイド、ニム青年が手を挙げて隊列を制止した。彼の指さす右前方の斜面に一〇〇頭をこえるカモシカの大群が悠々と草を喰んでいる。距離は一〇〇m、日本の岳人仲間でも珍らしい貴重な写真を撮ることができた。この日、パロ渓谷の最奥シャンコタン（四、〇〇〇m）で幕営。眼前の山の稜線はもうチベット国境だ。星は摄氏二七度、夜は零下一一度、しかし連日の快晴に恵まれながらトレッキングを続け、国王の誕生日に首都チンプーに入った。一夜ブータン政府ペムツエリン経済局長の宅へ招かれ、副大臣ほか三〇代の若手高級官僚と交歓、神戸にブータン友好協会を設立することに合意、この春に誕生した協会はボートピア・ブータン館の運営に大いに協力した。ここには書き切れぬエピソードを沢山もつて一行はブータンを離れた。

丹前に似た手織りの着物に山刀、ラマ教を奉じ、もの静かで礼儀正しく、誇り高きブータンの人たちに幸せあれ！ オンマニパドメフム！